

# 人と組織が変わる 対話を学ぶための10冊

職場の問題を解決し、イノベーションを生み出すには、  
対話を重視した組織づくりが求められるのではないのでしょうか。  
今号の特集の理解を深める10冊を紹介します。



**1 『組織化の社会心理学 [第2版]』**  
P32の宇田川氏が、組織論と心理の結びつきを研究する契機となった著作であり、「対話」の前提としての組織のあり方を研究するうえで必読の一冊。「組織は、自らが順応しなければならない“事実”とみなす現実を創造する」というアイデアに基づき、従来の機械的・静的な組織論から、認識を軸とした生命的・動的な「組織化」へと捉え方を転換させる議論は、実に刺激的だ。  
カール・E・ワイク=著 遠田雄志=訳  
文真堂 / 1997年

**2 『開かれた対話と未来  
—今この瞬間に他者を思いやる』**  
オープンダイアログの創始者のふたりが、その思想と具体的な手法を紹介する。対話それ自体を目的とする精神療法である「オープンダイアログ」と、未来を思い出し多職種連携を促す「未来語りのダイアログ」のふたつの対話の全容を掴むには最適な一冊。巻末の日本版オリジナル「対話実践のガイドライン」も理解に役立つ。  
ヤール・セックラ、トム・アーンキル=著 斎藤環=監訳  
医学書院 / 2019年

**3 『解決志向の言語学  
—言葉はもともと魔法だった』**  
ソリューション・フォーカスト・アプローチの創始者であり臨床家であるスティーヴ・ド・シェイザーの著書。クライアントの告げる「言葉」の深層を探る必要はないと、精神分析(ラカン派)に疑問を呈し、解決志向の理論を展開する。セラピストとクライアントの具体的な会話を掲載し、問題解決へと導いていく実践の事例も豊富。  
スティーヴ・ド・シェイザー=著 長谷川啓三=監訳  
法政大学出版局 / 2000年

**4 『〈いのち〉の自己組織  
—共に生きていく原理に向かって』**  
P2の露木氏の「関係的な自己」、P26の兼清氏の「ポウルの中の卵」——その土台にあるのが、著者の掲げる「共存の思想」だ。個と個、個と社会、人類と自然が互いに主客未分のまま〈いのち〉の自己組織を紡ぐという発想は、機械論的な「多から一へ」のゼロサムゲームを、生命論的な「一から多へ」の共創原理へと変える出発点になる。  
清水博=著  
東京大学出版会 / 2016年

**5 『ダイアログ  
—対立から共生へ、議論から対話へ』**  
今日にいたるダイアログ思想の画期となった記念碑的著作。「意味を共有」「明確な目的を定めなくてもよい」「説得は不要」「あらゆる想定を保留」など、分析やディベート的な勝ち負けを脱した、真にイノベティブなコミュニケーションとしてのダイアログのあり方は、読者それぞれの対話実践の現場において確かな指針となる。  
デヴィッド・ボーム=著 金井真弓=訳  
英治出版 / 2007年

**6 『会話・協働・ナラティブ  
—アンデルセン・アンダーソン・ホワイトのワークショップ』**  
「リフレクティング・プロセス」のアンデルセン、「ナラティブ・セラピー」のホワイトら、精神療法に多大な影響を与えた面々によるワークショップのドキュメント。生の言葉で語られる内容は、「問題／治療」から「協働」へと、私たちが生きる社会のコミュニケーションにも示唆を与える。  
タビオ・マリネンほか=著 小森康永ほか=訳  
金剛出版 / 2015年

**7 『現実はいつても対話から生まれる  
—社会構成主義入門』**  
私たちが「現実」だと思ふことは、すべて「社会的に構成されたもの」と捉える社会構成主義。著者はその第一人者で「言葉が世界を創造する」という立場から、一人ひとりの「対話」とそれに基づく「合意」を経て初めて「リアルになる」と説く。P26の兼清氏のダイアログ実践について学べる一冊。  
ケネス・J・ガーゲン、メアリー・ガーゲン=著 伊藤守=監訳  
ディスカヴァー・トゥエンティワン / 2018年

**8 『ソリューション・バンク  
—ブリーフセラピーの哲学と新展開』**  
37の解決事例をあげながら、ブリーフセラピーの理論と実践を紹介する。興味深いのは、日本におけるブリーフセラピー発展の特色として「非言語」による介入があるという解説。嫌がらせの手紙を靴に入れられる“いじめ”に対し、対象の学生と教師の靴箱をしばらく交換し、戻しただけで解決したというエピソードはその象徴である。  
長谷川啓三=著  
金子書房 / 2005年

**9 『生きることとしてのダイアログ  
—バフチン対話思想のエッセンス』**  
オープンダイアログがとりいれたこともあり、没後半世紀を経て再評価されるバフチン。未完成な自己を意識しつつ、他者との対話を「生そのもの」、互いを豊かに変えていく「闘い」と捉える思想は、今こそ新鮮。思想の中核をなす「ポリフォニー(多声性)」は、複数の対等な意識が支える「開かれた対話」の価値を改めて考えさせる。  
桑野隆=著  
岩波書店 / 2021年

**10 『精神と自然  
—生きた世界の認識論』**  
P14の生田氏やP26の兼清氏、P32の宇田川氏が言及する“知の巨人”ペイトソン。今日の先端的な精神療法の出発点となった「メイシー会議」参加を経て確立した、独自の生態学的な認識論は、今号の特集全体に深く関わる。生なき世界(プレローマ)から生きた世界(クレアトゥーラ)への転換を、方法論レベルから一般読者向けに説く。  
グレゴリー・ペイトソン=著 佐藤良明=訳  
岩波文庫 / 2022年